

たより

『美紗の会』 ニュース

第36号

平成十三年四月十六日

発行者
「美紗の会」
03-3441-2726
編集責任者
大久保 朋 子

花の色は移りにけりな

西松 布 咏

新世紀もまたたく間に過ぎてゆき、桜の花びらが、はら／＼と舞う季節になつてしましました。

花も雪も払えば清き袂かなほんに昔の昔のことよーなんと今年はじめの「たより」でございます。

遅ればせながら過ぎし日を返りみますと、私の唄は「ゆき」で始まりました。一月二十七日大阪泉の森ホールでの「ふれあいマルチ蔵コンサート」に出演の為、早朝飛行機で向かうはずが絶え間なく降る雪の為欠航！

新幹線に乗っても間に合わず、やむなく日程を変更しての公演となりました。幸いお客様が、来て下さり、想い出に残る温かい触れ合いを感じるコンサートとなりましたが、自然の前に文明の利器のなんと非力なこと！と「ゆき」の偉大さを感じました。二月十八日の新潟大湯温泉での「雪と邦楽と懐石の会」の雪の出逢いは格別でした。上越新幹線で大浦を過ぎると、一面の雪景色で川端康成の「トンネルを過ぎると雪国であった」の冒頭の「ページが目まだ三十代の若夫婦が、代

を継いで古い旅館のイメージをどう刷新してゆくかを模索しての企画、友家ホテル五十年記念イベント。ほんやりとライトアップされた川ぞいの雪景色を背景に、江戸情緒を出しながら雪を織り込んだ唄を、ぼつり／＼と話しながら唄わせていただきました。

この時の雪は、しだいに夕闇と連れ立って私の唄を異次元に誘ってくれ、お客様の心に静かに降りてくれたよう、幸せなひと夜でございます。桃の節句が過ぎ、梅だよりが風に乗るうららかな日、三月十一日第二十一回美紗の会が開かれました。

お陰様でこのところ大型新人が、あいつぎ、前回デビューした高野さん、三雲さんが、早くもコンビを組んでの登場とあって、ヒヤ／＼ものでしたが、「芝で生まれて」で頼もしい新コンビが生まれました。美大の先生伊勢さんは、生徒から「新内先生」と言われる程三味線にはれてしまひ今や着流しで「木遣りくづし」を、そして入門して一ヵ月足らずの生稲さん登場。産婦人科の開業医とあってあれっという間に「さくら」をマスター、「お江戸日本橋」

豊穣な「闇」の楽しみ 十二月十二日 「時雨降る夜の逢うは別れ」

ヤリタミサコ

二十世紀末はすべてを人工照明で明るく照らしすぎて、人の心の陰影、情感の微妙なニュアンスというものを侵略してしまつたのではないかと。最近は一心の闇というコトバはマイナスの意味に使われるが、心理学で人の心がすべて説明できるわけでもない。心の闇とは、コトバにできない悲しさや切なさや溶け込んでいる豊かな思いのほしさだ。

舞台には、濃密な闇が満ちている。女一人・屏風一枚・布一枚で、季節の風と男女の情愛を描く踊り、三味線と笛と声で感情の機微を伝える唄。この空間の持つ闇の深さと濃

ん「綱は上意」
今回はじめての男唄「権九郎」を見事に唄いこなした増田さん、すっかりおなじみのお客様竹澤さんの色づぼい「主さんと」そしていぶし銀の芸のお手本、内藤さんの弾き語り「当代珍し」と、バラエティーに富んだ番組で駆けつけて下さったお客様も多いに一緒に楽しんで下さいました。

厚さといったら。涙も汗も悲嘆も幸福もたつぷり含んだ、マーク・ロスコの一見単純に見える絵のよう。ロスコの暗い青の画面にも、この夜の唄と踊りにも、心の時間と苦しみとがコンデンスされている。

田中優子さんが「せつなさ、やるせなさ、あきらめ」の美学というお話をされた。私はこれをお話をされた。私はつまり、人の世は不条理に満ちていて、それを合理化したり理性的にコントロールしようとするのではなく、カミュやベケットのように、不条理は不条理そのものとして受容する、ということ。そのためには、断念や諦念が必要となつてくる。親より先に子どもを死なせてしまふ、恋し

あつてやるのに結ばれない二人、義理やしがらみに強要される行為、不慮の病や死、など近松を持ち出すまでもなく、神に怒りをぶつける他には方法がないことがある。充分に悲しみ、そしてあきらめ、それから現実へソフトランディングしていくこと。そのプロセスの美学。

西松布咏さんの唄と花柳千寿文さんの踊りでの端唄三曲は、水を象徴する布・屏風・懐紙・羽織が効果的に使われ、忍ぶ恋やきぬぎぬの別れ、などの場面を生き生きと感ぜさせる。大劇場の大道具小道具合唱つきのオペラには醸しだせない、小宇宙の情念である。シンプルゆえの豊穣さ。

歌詞もまた遊びが隠されていて、音・意味・視覚のどの観点からも楽しめる。次は、田中さんのお話をはさんで、西松さんのソロ。歌沢二曲と上方唄の「柳やなぎ」は、女心の切なさや可愛らしさが表現されている。「エイじわるな」「あた腹の立つ好きじゃえ」というコトバは唄でもセリフでもなく、恋する女の普遍的な心だ。長唄「初しぐれ」は寺師美智子さんの笛も入り、花柳さんの踊りがすばらしい。後ろ姿が饒舌に語る、抑えてはいるが深い情念、首の角度や足と腰が表現する内に秘めた心の動き。あえてリビドーと呼びたい。

圧巻は、泉鏡花の現実と幻想の交錯する「歌行燈」。葛西聖司さんの語りや、物語の世界に引き込んでいく。ことばの流れるリズムが心地よい。満月よりも少し欠けた月と川面が見え、四人の人物が立ち上がってきた、小野里禮子さんの仕舞と小野里修さんの地揺が幻想と現実を溶け合せていく。田中優子作詞の「幻のお三重」の最後「私の身体は舞いました」が花柳さんの踊りと西松さんの唄のクライマックスで、ぞくぞくするほどエロスに満ちていた。西松さんの「の」という喉の音の官能的な響きの快楽。暗いステージに三味線のバチから反射する鋭い光が凍てつく川面のように、行燈に見え隠れする人間存在の不思議さ、夜明けの暗い森での逢瀬、仄暗さと闇と明かりとの交錯する人間関係、イメージが鮮明に表出されてくる。

闇が抱える豊穣さに圧倒された夜であった。

